



学会のために上京した西岡健先生
(右)と横浜中華街で再会

大学院修了後、旭川厚生病

医学部卒業前に、何科の医者になるか悩んでいた。もちろん、両親からもアドバイスしてもらった。学生時代、解剖学や脳神経に興味をもって脳外科医になろうと思っただが、年齢を考えて諦めた。臨床実習中に、印象に残った先生は講師(現北大保健学科教授)の西岡健先生であった。西岡先生の

放射線腫瘍医への道

礎医学を中心に勉強していたが、昼の約二時間のみは一緒に日本の国試の過去問を勉強していた。こんなに没頭できたのは妻のアルバイトによる家計の支えのおかげだった。二〇〇二年三月、約三〇%の合格率の台湾国試にトップ10レベルの成績で合格した。渡部君もトップの成績でSteinを通過した。二〇〇一年五月に、二人とも晴れて日本の国試に受かった。危機は転機だった。

専門は頭頸部腫瘍であって、実習中に患者さんに優しく、触診や内視鏡・エコーをしながら腫瘍形態をスケッチする姿をみて、これは放射線科医であろうか、まるで内科のような診療であると驚いて今までの放射線科に対するイメージが一変した。そして、放射線科医になることを決意した。

たまたま臨床ジャーナルクラブに採り上げられた上咽頭癌治療文献は台北の和信治療中心(癌センター病院)からの治療成績報告であった。これをきっかけに帰省の際に同癌センター放射線治療腫瘍科への見学を電話で申し入れた。突然の依頼にもかかわらず、同科主任の簡哲民先生が同センターおよび放射線治療部門を案内し、放射線治療を丁寧の説明してくれた。私はこれから放射線治療の道を歩んでいくことを確信した。

がんばります

大学院の研究テーマは、
助教授(現教授)の白土博樹

院に赴任したが、主に大学であまり勉強できなかった食道がん、肺がんなどの一般放射線治療を研修していた。当病院は地域病院といっても、道北では放射線治療患者数が一番多く、放射線治療基幹病院と言える。これは上司である高邑明夫先生が一人で努力された賜である。また、地方に住むがん患者さんの事情を認識できた。弊害があるといわれている医局制度がなければ、地域医療の維持は大変だと思う。大都会に住む人々が医療に本当に恵まれていると実感した。

二〇〇五年四月、がん診療をさらに勉強するために駒込病院勤務になった。がん患者の多さと多様化に驚き、その患者の治療に追われる毎日だった。しかし、昨年、認定医試験に合格し、放射線治療専門医になった。今、主に一般放射線治療から脳定位放射線治療、肺がん定位放射線治療、前立腺がん小線源治療などを担当している。これからも放射線腫瘍医として邁進していきたいと思っている。

一九九〇年九月から今日まで、さまざまなる人、事と出会い、その喜怒哀楽の体験が人生の宝物であると思っている。この場を借りて楽しく充実した留学体験を可能にさせてくれた石坂財団および生命保険協会の皆様に心から感謝を申し上げます。

がんばっています

国際文化交流財団一九九七年度奨学生。台湾・桃園県出身。一九八六年台湾国立台北工業專科(高等專門)学校(現国立台北科技大学)放射科卒業。一九九四年秋田大学鉱山学部卒業。二〇〇〇年北海道大学医学部卒業。二〇〇一年台湾、日本医師国家試験合格。同年同大学放射線科教室に入局。二〇〇四年同大学院医学研究科博士課程修了(医学博士)。二〇〇四年JA北海道厚生連旭川病院放射線科勤務。二〇〇五年から現職。

都立駒込病院放射線診療科治療部門

張 大鎮

ちょう たいちん

🌟 日本に留学

一九八八年六月に、二年間の義務兵役を終え、これからの進路について頭を悩ませていた。この時、母校恩師・林安熙先生(秋田大の前身・秋田高専OB)を思い出して相談した。林先生は授業中に、よく自分自身の秋田高専や秋大研究留学の生活や秋大に留学した母校先輩たちの活躍ぶり、秋田の風俗人情などの話を聞かせてくれた。その後、父親に海外留学したい気持ち伝えて、大賛成してくれたので、秋大に留学することを決意した。一九九〇年九月に林先生の推薦状をいただいて、秋大の恩師・故品田豊先生をお訪ねして、十二月の大学編入試験に合格することが入学の必須条件であることを教えていただいた。試験まで残

り僅か三カ月で必死に日本語を勉強したが、試験科目は数学や理科が中心だったので、幸い、秋大鉱山学部物質工学科材料コース二年次編入試験に合格した。

四年生の時に、最愛の二番目の妹が病気のため、二一歳の若さで亡くなったことであって大学院推薦を辞退し、医学の道を選んだ。一九九四年に北大医学部に合格し、入学した。

🌟 医学への道

医学への道は決して平坦ではなかった。日本の留学政策により、留学生が着実に増えてきた。その結果、数少ない奨学金、ことに学部留学生に対する奨学金を支給できる団体と額が大学院留学生に比べて多くなかったし、それを申請して受け取る確率は

●国際文化交流財団は、経団連第二代会長故石坂泰三氏の遺徳を記念し、一九七六年に設立された。これまでに、世界三十一カ国の大学・大学院へ一七二名の日本人留学生を派遣するとともに、世界三七カ国四九〇名の外国人留学生への奨学金の供与や講演会等を実施してきている。

決して高くなかった。この頃、結婚、息子の誕生はおめでたいことであつたが、父親の退職と病気のため、家計が一層厳しくなつた。医学部は高学年になるほど、勉強する時間が要求されるので、アルバイトを増やしたいと思つても、不可能な状態だつた。幸いこのとき、大学からの推薦を受けて一九九七年度SEIHOの奨学生として認められて、経済的に楽になつた。さらにいろんな支援を受けて、二〇〇〇年に医学部を卒業し、大学院に進んだ。

しかし、その年の医師国家試験合格者のなかには私の名前がなかった。私にとつては衝撃で本当に大きな挫折だつた。時間は無駄にせず、まず、同年十二月末の台湾国試に合格することを目指そうと考えた。同期の渡部亮君も国試に再チャレンジだったが、アメリカ医師免許試験(Score)を目指していた。台湾とアメリカの受験科目は臨床医学以外に解剖学などの基礎医学が必須であるので、八月末から二人とも、朝から夕方まで大学図書館で、それぞれの基

(注)生命保険協会から寄付された基金を元を実施している外国人私費留学生奨学金制度